空間あい サロンコンサートX ～あなたに愛と調和と芸術を～

Lotus String Quartet. Stuttgart

The 30th Anniversary Concert by Lotus String Quartet since 1992

ロータス・カルテット結成30周年記念コンサート

高崎芸術劇場初登場

東京クワルテット解散後、

日本発祥で25年以上国際的に活躍する唯一の存在

2023年2月26日(日) 14:00開演(13:30開場)

高崎芸術劇場 音楽ホール

February 26th 2023 Sunday TAKASAKI CITY THEARTRE CONCERT HALL

主催：株式会社 空間あい　後援：上毛新聞社、群馬テレビ、FM GUNMA、ラジオ高崎

今回の譜面は、4台のiPadで、Bluetoothを介して操作されます。お客様が客席にお持ち込みの電子機器から発せられる電波と干渉して操作が不能になるケースが見受けられます。少しでもリスクを減らすため、メール・電話着信などの音声受信などによる演奏への妨害を防止するために、『携帯電話など電波や音声を発する機器の電源はお切りください。時計のアラームは解除願います』

Program

ハイドン：弦楽四重奏曲ニ短調 作品76-2 Hob.Ⅲ:76「五度」
Haydon: String Quartet in D minor op. 76-2 Hob.Ⅲ:76 “Fifths”

第1楽章　アレグロ
第2楽章　アンダンテ・オ・ピウ・トスト　アレグロ
第3楽章　メヌエット、アレグロ・マ・ノン・トロッポ
第4楽章　フィナーレ。ヴィヴァーチェ・アッサイ

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第6番 ヘ短調 作品80
Mendelssohn: String Quartet in F minor op. 8

第1楽章　アレグロ・アッサイ
第2楽章　アレグロアッサイ
第3楽章　アダージョ
第4楽章　フィナーレ。アレグロ・モルト

休 憩（20分）

シューベルト：弦楽四重奏曲 第14番 ニ短調 D. 810「死と乙女」
Schubert: String Quartet No. 14 in D minor D810 “Death and the Maiden”

第1楽章　アレグロ
第2楽章　アンダンテ・コン・モート
第3楽章　スケルツォ　アレグロ・モルト
第4楽章　プレスト

Program Note 音楽評論家　渡辺　和彦

日本のカルテットが海外の一流コンクールで優勝、またはそれに近い結果を獲得することが多くなってきた。しかしある時期まで、それは東京クァルテット（2012年解散）とロータス・カルテットに限られていた。とはいえ「日本の」というのはあまり正確でない。「ロータス」の本拠地は南ドイツ・シュトゥットガルト。そこは師であるメロス・カルテット（往年のドイツの名カルテット）の本拠地だった。今回もまた、彼の地からの「来日公演」となる。

第2ヴァイオリンが何回か交替しているものの、4人のうちの3人は1990年代から30年以上も不動。これはメンバー入れ替わりが激しい近年のカルテットの中ではかなり珍しい。過去何度か接した舞台演奏では、演奏ピッチ（4人の音程とハーモニーの具合）が驚くほど正確均質で音楽的。これは技術云々はもちろんだろうが、長いあいだ同じ土地で生き、音楽活動している成果でもあるだろう。ロータスの4人は日本と南ドイツをルーツとしているが、演奏の感触は「南ドイツ」が強いかもしれない。今回は第2ヴァイオリンが新しい人に交替。今そのことで4人の演奏はどのように変わり、または変わらないのか、とても興味深い。

ハイドン

弦楽四重奏曲ニ短調 作品76-2 Hob.Ⅲ:76「五度」

ハイドン（1732〜1809）の「作品76」（全6曲セット）は1797年に作曲され、エルディーティ伯爵に献呈されたので「エルディーティ四重奏曲」と呼ばれることがある。6曲は全て傑作で、現存するハイドンの真作弦楽四重奏曲の最高傑作とされている。この中には「五度」（第2番）、「皇帝」（第3番）、「日の出」（第4番）、「ラールゴ」（第5番）が含まれ、ニックネームを持たない第1番ト長調や第6番変ホ長調も演奏会の常連作品となっている。

本日の「五度（Quinten/Fifths）」のニックネームの由来は、第1楽章冒頭がインパクトの強い5度音程の下降で始まるから。そしてこの楽章や続く楽章も含めて「五度」が支配している。また第3楽章メヌエットは曲想から「魔女のメヌエット」として単独で演奏されることがあり、そのためかつては全体を「魔女（Hexen）」というニックネームで呼ぶ習慣もあったという。戯れに第1、2、4楽章にも「魔女の〜」というニックネームを与えた日本の研究者もいる。

第1楽章　アレグロ　ニ短調。冒頭の「五度」主題は4つの声部に頻繁に現れる。第2主題は平行長調のヘ長調。古典派では大半の音楽が長調で作られ、短調作品は特別の意味を持たされるが、この曲ではそうした意図は特にないかもしれない。本日の演奏はどうか。

第2楽章　アンダンテ・オ・ピウ・トスト　アレグロ　ニ長調。出だしの主題は変奏曲が始まるかと思わせる8分の6拍子のアンダンテ。しかし実際には三部形式の音楽で、中間部は楽譜の調号が取れてニ短調から転調していく。

第3楽章　メヌエット、アレグロ・マ・ノン・トロッポ　ニ短調　「魔

女のメヌエット」として有名な楽章。曲の構えが大きく、交響曲の中に入れてもおかしくない構造を持っている。トリオ(中間部)はニ長調。
第4楽章　フィナーレ。ヴィヴァーチェ・アッサイ。ニ短調。短調の終曲だとはいえ悲劇的な感じはあまりなく、むしろ軽快。開始8小節目、ヘ長調属七の高いe音で一端終結する(フェルマータ)有名な主題で始まる。その後いろいろ面白い音の動きをする。

メンデルスゾーン

弦楽四重奏曲 第6番 ヘ短調 作品80

フェーリクス・メンデルスゾーン(1809〜1847.11.4)は一般に「短命ながらも幸福な生涯を送った人」というイメージをもたれている。しかし実際には生涯病弱で、成人してからはユダヤ人差別に苦しみ、姉ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル(1805〜1847.5.14)を生涯慕い続けるという複雑な生涯を送った。この弦楽四重奏曲第6番は「姉ファニーへのレクイエム』と言われることがある。

メンデルスゾーンには正規の弦楽四重奏曲が6曲と、習作や番外カルテット的作品が数曲ある。その中で第6番ヘ短調(1847)は、20世紀中は「内容が異様」「弦楽四重奏曲というよりヴァイオリン協奏曲のよう」という批判が多く、敬して遠ざけられる傾向があった。しかし現在は評価が逆転、メンデルスゾーンの弦楽四重奏曲の中では第1番変ホ長調作品12や、第2番イ短調作品13と並ぶ名作として演奏頻度が急増している。ここ数年に限るならば、本日の第6番の実演回数がも最も多い。

この曲が創作される直前の1847年5月、実姉のファニー(結婚してファニー・ヘンゼルとなっていた)が突然死亡するとう事件があつた。弟の作曲家フェーリクスの悲しみは深く、周囲が真剣に心配するほどだったという。そうした中で創作されたのがこの弦楽四重奏曲だった。内容はこのジャンルの音楽としては過去に例がないほど緊迫感が強く、前記のように長い間「理解不能」とまで言われた。そして曲が完成した2か月後、当の作曲家フェーリクス・メンデルスゾーンもまた38歳の若さで亡くなり、曲は自らの「レクイエム」ともなった。楽譜は作曲家の死後1850年2月になって初めて刊行されている。
第1楽章　アレグロ・アッサイ　ヘ短調。冒頭からただならぬ雰囲気を漂せるトレモロ、慰めを感じさせる変イ長調の第2主題の2つの要素がせめぎあい、やがて狂気のようなクライマックスを築いていく。
第2楽章　アレグロアッサイ　ヘ短調。スケルツォに相当する舞踏楽章。調だけでなく演奏指定も前の章と同じ。暗いユニゾン(斉奏)部分が多く、冒頭からのシンコペーションと半音階的な上行音型をもつなど、これも「異様」な音楽。トリオ(中間部。チェロが主導権をもつ)もヘ短調。普通は単純なリピート記号で済ませられる第1部が戻ってくる箇所も、ていねいに全ての音譜が書き込まれている。
第3楽章　アダージョ　ヘ短調～変イ長調。「姉ファニーが残した250曲余りの歌曲の素材ベースにしている」とする研究者や、「しつこいまでに追想の思いあふれている」と評価する人がいるなど、これも問題の楽章で、聴き手に強いインパクトを与える。終結の直前では身もだえするような悲痛な音型も現れる。
第4楽章　フィナーレ。アレグロ・モルト　ヘ短調。ヴァイオリンは叫び、チェロは唸り声をあげ、苦悩と絶望が渦巻くフィナーレ。最後のコーダ部分ではヴァイオリン協奏曲であるかのように第1ヴァイオリンが取り乱して疾走(というより暴走)する。従来のメンデルスゾーンのイメージを覆す、私小説的な一大傑作といえる。

シューベルト

弦楽四重奏曲 第14番 ニ短調 D.810「死と乙女」

シューベルト(1797〜1828)の最後から2番目の弦楽四重奏曲にあたる第14番ニ短調「死と乙女」(1826)には際立った特徴がある。約9年前の1817年2月に創作していた歌曲「死と乙女」D.531(マティアス・クラウディウスの歌詞による)のピアノ前奏とその先のパートにある”死に神の行進を思わせるような”と形容される音域の狭い和声的な動機をそのまま第2楽章の主題として転用していること。それ以外にも第1楽章にもその変形が利用され、第3、第4楽章には気分的に”死の影”が漂っている。その原因として、1823年にシューベルトが当時は”不治の業病”とされていた梅毒に感染して強く”死”を意識したらしいことがあるとされる(だし近年は異論も出ている)。

曲は1826年2月1日に、シューベルトの歌曲をよく歌っていた歌手、ヨーゼフ・バールトの私邸で演奏されたと推測されるが演奏記録はなく、作曲家の死後3年が経過した1831年にようやく楽譜が出版された。公開初演はさらに遅れ1833年3 月21日にカール・モーザー弦楽四重奏団によってベルリンで行われている。
第1楽章　アレグロ　ニ短調　4分の4拍子。冒頭フォルテッシモで叩きつけられる強烈な動機には歌曲「死と乙女」の伴奏主題の3連符リズム要素が注入されている。第2主題は一息入れ、ヴィオラ伴奏に乗って第1＆第2ヴァイオリンが奏でるヘ長調の平穏な感じのメロディー。その先もかなり長く充実。提示部の繰り返し指定を経て展開部ではかなり充実した主題展開が行われ、その頂点で強烈な第1主題が戻ってくる。再現部は定石通り主題が再現されるかに思わせ、その後で不気味な響きのコーダへ。最後は冒頭の動機を弱く繰り返し、謎めいた終結に到る。楽譜に書かれている繰り返しを忠実に行うと、かなり大規模な音楽になる。
第2楽章　アンダンテ・コン・モート　ト短調　2分の2拍子。前記のように歌曲「死と乙女」をもとにした変奏曲。主題は歌曲の冒頭でピアノが奏でる陰気に音を引きずる伴奏動機(8小節)で、楽譜には繰り返し記号が付いている。これに続く第9 〜16小節はこの弦楽四重奏曲ために新たに創作された動機で、この後また冒頭の動機が接続される。これが終わるとすぐに変奏に入る。変奏は5つで、その後にコーダ部分が続く。区切り目が明解なので耳できくだけで数えることも可能。チェロが幅広く歌っていく第2変奏は感動的で、チェリストの聴かせ所になっている。激しい第3変奏を経て、4変奏では明るいト長調に美しく転換。ここしは第1ヴァイオリンがピアニシモで優しく囁いていき第5変奏の後半で曲は再び高揚、カオス的な響きに到達する。しかしコーダ部分では諦めたかのようにピアニッシモとなり、最後は不思議な透明感の中ト長調で終結する。
第3楽章　スケルツォ　アレグロ・モルト　ニ短調。シンコペーションのリズムを持ったスケルツォで、演奏によってはかなり激しい緊迫した音楽となる。トリオ(中間部)は一転、おだやかな感じのニ長調の音楽で、第1ヴァイオリンが繊細な表情を作る。
第4楽章　プレスト　ニ短調　8分の6拍子、タランチュラ舞曲のリズムによる主題(A)と、これとコントラストをなす音を押しつけて行くような力強い動機(B)が何度も繰り返されるフィナーレ。形式としてはAとBの間に、何度が別の経過句が挿入される形のロンドだが、そうしたことよりも、この楽章全体をおおう焦燥感や暗い情熱の迸りに注目。最後はプレスティッシモ指定でいっそう速くなり、一瞬明るいニ長調へ転換しておきながらまた暗いニ短調に戻ってしまい、そのまま激しく全体を閉じる。

まぼろしのアンコール

やっと本日ロータス・カルテットの演奏会までこぎつけた。ロータス・蓮は、泥沼から天に向かって一凛の花をさかせるが、地中の中心に伸びていく根菜類もある。ある意味で、弊社は、天に向かって花を咲かせ、地中に向かって準備をしている。AFF ARTS for the future「コロナ禍を乗り越えて」は、文化庁がコロナ禍で営利を目的する株式会社にも助成したまれな制度だった。そのスキームがあったからこそ、2021年から2022年に、開館60周年群馬音楽センター群響演奏会、高崎芸術劇場の音楽ホールでの7回のコンサートと大劇場で2回と合計10回の演奏会を開催することができた。ほぼ奇跡にちかいコンサートであった。しかしながら今回のロータス・カルテットは、公的な助成をうけない単独の演奏会として新たな挑戦である。2022年には、下記の演奏会に取り組んだ。

5月　21日（土）　大谷康子と群馬を旅するコンサート～群馬交響楽団の首席とともに～
7月　 2日(土)　クリスティーナ・ヴァツロヴァ＆大嶋義実デュオ・リサイタル
9月　 3日（土）　モルゴーア・クァルテット
11月　30日（水）　追悼エリザベス女王を讃えるVol.1 英国女王陛下の近衛軍楽隊
2月　 7日（水）　追悼エリザベス女王を讃えるVol.2 ロジェ・ワーグナー合唱団

ゲネプロ終了後ウクライナ情勢を語る英国武官

AFFは、外国人のアーティストだけの招聘演奏会は、採択にならないが、国内の舞台芸術家が様々な形でかかわり独自の制作することで認められる。大劇場において、プロフェッショナルとして実演に携わるのは、劇場の主催、群馬交響楽団、地元上毛新聞社の3社だけであり、ほとんどは、群馬音楽センターとは、異なって、在京のプロのマネージメント会社が貸しホールとして事業を展開している中で弊社が初めての挑戦であった。芸術文化に携わる地元の会社が大劇場において開催するのは、まれであり、最初で最後の演奏会だったかもしれない。そんな中で、おりしも日英同盟120周年、2022年11月30日でのの英国女王陛下の近衛軍楽隊演奏会での出来事である。

演奏をバックに英国連邦について語る中村ひろみ

陸上自衛隊と英国陸軍の実動訓練「ヴィジラント・アイルズ22」が昨年11月22日、我が家から北へ9キロほどの群馬県榛東村の陸自相馬原駐屯地で始まり、陸自第1空挺団と英陸軍第1王立騎馬砲兵連隊の計約160人が開始式に臨んだ。訓練は30日まで続いた。陸自と英陸軍の実動訓練は2018年、19年に続く3回目で群馬県では初めてである。26日からの総合訓練では、航空自衛隊第7航空団と連携した島嶼防衛を想定し、偵察や弾着誘導などを訓練した。開始式で、地政学的な類似性を持つ両国が、島嶼防衛という共通テーマで信頼関係を構築することはとても有意義であると。この30日の閉会式において、女王陛下の近衛軍楽隊が英国国歌を演奏するために招かれたのである。この業務が入ることによって、軍楽隊の高崎芸術劇場での11月30日のスケジュールは、変更を余儀なくされた。事実、彼らにとって、この閉会式が高崎芸術劇場での演奏会より、重要であった。英国陸軍にとって、女王陛下の軍楽隊が参加することは、エリザベス女王がご臨場しているのと同等である。先日ウィーンから来客した友人、群響永久名誉指揮者マルティン・トゥルノフスキーの子息の奥様が、キーウとウィーンは、100キロ、東京、高崎に距離で、まさに高崎にとっては、東京空襲が起きているとの同等だと。そして18時開演の高崎芸術劇場でのゲネプロは、1時間以上遅れた。ゲネプロ本番で行うナレーションにも影響を受けて演出、構成は、思い通りにならなかった。それでも彼らにとって、閉会式に出席して英国国歌を演奏することが、重要だった。その後遅れて、在日英国大使館職員、武官が4名が高崎芸術劇場に到着して、ゲネプロ終了後に全員が集められ、舞台で長いスピーチをしていた。その軍楽隊のメンバーの真剣な眼差し、そのスピーチは、延々と世界情勢、ウクライナ情勢、そして軍楽隊が閉会式に参加したことの重要性を語り始めた。そして4人の大使館員、武官のために、なんと日本民謡の「さくらさくら」演奏し始めた。さくらが終わろうとした時、開場時間の17時になった。私は、総括責任者として開場宣言した。自由席は、開場時間を遅らせること、ロビー開場するのも、順番がくるうので許されない。そしてお客さまが席取り合戦している最中に、舞台では、八木節が演奏され始めた。「私は、アンコール曲がばれてしまった。練習してないために、八木節を練習している」ぐらいの軽い気持ちで考えていた。ところが、威風堂々の前の八木節は、本番では演奏されることはなかった。指揮者に、京都、大阪への同行中に打合せして、八木節の発祥地、群馬にもついても説明した。指揮者それは、楽しみだと言っていたが、怒涛のように会場内に入って席とりしている、お客さまは、八木節聴きながら、グットポジションを獲得できた幸運な100人以上のお客様だった。まさに幻のアンコールだった。そのまぼろしアンコールは、英国近衛軍楽隊のホームページで紹介されており楽しむことができる。ほんの少しだけだが、高崎芸術劇場での公演の様子も確認できる。いずれにせよ、11月30日での出来事は、だれも計画したものではなく、必然だったかもしれない。

高崎だるまをもってカーテンコール。この前に八木節が演奏されるはずだった。

まぼろしの
アンコールは
こちらから!!

（株）空間あい　新井 浄

あなたに愛と調和と芸術を
株式会社 空間あい

株式会社 空間あい　代表取締役　新井　浄
〒370-0087 高崎市楽間町280番地14　Phone 090-1815-4608　Fax 027-344-1582
【E-mail】info@kuukanai.com　【HP】https://kuukanai.com　【ONLINE SHOP】https://shop.kuukanai.com